

「1 学期後半スタート朝会で話したこと・・・+ α」

令和7年8月29日

8月25日(月)1学期後半がスタートしました。後半開始を前に、リモートで朝会として子ども達に話をしました。話したのは沖縄尚学高校の夏の甲子園大会優勝の話。今年の夏の甲子園は、沖縄尚学の優勝までの熱い戦いもありましたが、「熱戦」と呼ぶにふさわしい試合が多かったように思います。延長タイブレークに纏れた試合は8試合。高校球児の夢と努力の結晶がぶつかり合う試合は見る人に大きな感動を与えました。

沖縄尚学の試合も1回戦の秋田県代表金足農業との試合からひやひやドキドキの連続。「手に汗握る」とは、こういう試合展開にこそ当てはまる言葉だと思うと同時に、二回戦からは、「安心する試合展開を頼むよ」と心で願う私がいきました。しかし、実際は、2回戦の鳴門高校から決勝戦の日大三高との試合に至るまで、全試合が「手に汗握る」試合展開でした。(沖尚が優勝を飾った今となっては、ぎりぎりの試合展開が優勝の喜びを倍増させているのですが…)

前置きが長くなりましたが、子ども達に話したのは、準決勝の山梨学院大学付属高校との試合についてです。

沖縄尚学の選手の皆さんの頑張る姿に校長先生は大きな感動を覚えました。それは、試合を見ていた皆さんも同じ思いだったのではないのでしょうか。

校長先生は、今、58歳です。沖縄尚学の選手は17歳とか18歳の年齢の高校生です。校長先生は、校長先生より40歳以上も若い選手の皆さんから次のことを教えられました。それは、準決勝の山梨学院大学付属高校との試合からです。試合は5回を終わって4対1で負けていました。沖尚は、それまでの試合、完璧と言っていいほど守りがしっかりしていました。ですが、この試合では、今までになかった守りのミスが多く出てリードを広げられました。校長先生は、正直、「今日は無理だ。負けだ」と心の中で思っていました。負けると思うだけでなく、今、思えば頑張っている選手にとっても失礼なことをしたと思っていますが、その時は、ミスが出たことにイライラして怒っていました。ですが、選手の皆さんは校長先生とは違いました。諦めていなかったのです。逆転できると信じて自分たちの力を出し切ろうと考えていました。ミスをした選手は、自分のミス・失敗を取り返そうと自分を信じて力を出し切ろうと頑張ったのです。結果は大逆転。沖縄尚学高校が勝利をおさめました。校長先生は、最後まで、自分や仲間を信じて、自分にできる精一杯の努力を続けることの大切さを、沖縄尚学高校の選手から、この年齢になって学びました。豊崎小学校の皆さんも、勉強やスポーツで、もう無理、自分にはできないと思うことがあるかもしれませんが、自分や仲間の力を信じて、自分にできる精一杯の努力を尽くせる人になってほしいと思います。「努力は嘘をつかない」という言葉がありますが、そのことを沖縄尚学の選手の皆さんが証明してくれました・・・。

沖縄尚学の選手ではありませんが、今年の甲子園で印象深く残っている選手に、県立岐阜商業高校の横山選手がいます。試合を見た保護者の皆さんはご存じだと思いますが、彼は生まれつき左手の指がありません。横山選手は左利きです。左手でボールを投げることができないので、グローブをはめていた右手からグローブを外し、右手で送球するのです。バッティングも見ましたがハンデを感じさせない程、パワフルなスイングをしていました。昔、メジャーリーグに右の拳が生まれながらに無いジム・アボット投手がいました。ヤンキース時代にはノーヒットノーランの偉業を達成しています。アボット選手の言葉です。「不可能は神が決める。しかし、人間の意思は不可能を可能にする」と。子ども達に知らせたい実話です。



ところで、今年は戦後80年。日大三高との試合を前に、ベンチ入りする20名のメンバーのコメントが琉球新報に掲載されていました。そのうちの数名が戦後80年に触れていました。また、決勝を前に比嘉監督は「激戦地だった沖縄で、80年にあたるところで決勝戦に進出できることは価値があることだと思います」と語り、優勝後には「そういう巡り合わせの年に出場させて頂いた。こういう大会自体、平和だからできていることだと思う。ですので、高校野球だけでなく、全ての高校生の生活が当たり前で平和にできることを祈るばかりです」と語っています。野球ができることの幸せ、自分の夢を描き夢に向かって頑張ることができるのも平和だからです。今年の甲子園、様々なことを教えてくれた大会でした。